

ジョン・ウェブスター「白魔」について

—この世には悪魔にも階級がある—

谷 崎 寿 人

1

作者ジョン・ウェブスター (John Webster) の生涯については、その生年没年についてすら不明である。種々の推定の結果、生年は1580年代のはじめ、没年については1625年から1634年の間ということである。これらは劇作家としての活動開始時期が1602年ごろということから判断したものである。ウェブスター全集の編纂者であるルーカス (F. L. Lucas) のことばによれば

Of Webster's life we know almost nothing, less than of Shakespear's, less than of dramatists as distant as Aeschylus or Sophocles, Euripides or Seneca¹⁾ とある。したがって父親の職業が何であったか、彼がどのような教育を受けたか、あるいは創作開始以前に俳優であったかなかったか、いずれも不明である。俳優であったかなかったかについては相対立するふたつの説があるわけであるが、いずれもきめてとなるものがないようである²⁾。

ウェブスターは、ヘンズロウ (Phillip Henslowe ?—1616 エリザベス朝の劇場経営者) の日記—これには上演された作品、劇団、劇場の収支等克明に記されている—によると、その初期においてはいくつかの合作をしている。その後単独で「白魔 (The White Devil)」と「モルフィ公爵夫人 (The Duchess of Malfi)」を書き、この二作によってウェブスターの名は今日まで不朽のものとなっている。

「白魔」は、当時実際におこった事件を素材としたものといわれている。ふたたびルーカスの解説によれば次のとおりである。

The White Devil is based on a tragedy of real life which had made a deep impression in Italy a quarter of a century before³⁾

当時の劇作家たちは、中世以来の宗教と結びついていた演劇から離れて、人間の能力の偉大さをたたえる作品を生みだし、観客もまたこれを歓迎するという風潮がすでにあった。なかんずくマキアヴェッリ (Niccollo Machiavelli 1469—1527) の思想が、当

時のイギリス人の心をとらえ、劇中にも権謀術数を駆使する人物がしばしば登場し、これをマキアヴェッリの行為であるとか、マキアヴェッリの徒であるとしていた。この「白魔」の中にも、そのような人物一たとえばフラミーネオ (Flamineo)・・・この劇の女主人公ヴィットーリア (Vittoria) の兄であり、自己の出世のためには妹をも犠牲にする程の人物、あるいはフランチスコ (Francisco)・・・ブラチアーノ (Bracciano) の妻イザベラ (Isabella) の兄、イザベラが殺害されたためその復讐をする人物一がある。当時のイギリス人にとって、同時代のイタリアは文化の面で優れているとともに、姦通、陰謀、殺人等が頻繁におこなわれる国と考えられていた。そのイタリアに実際におこった事件をもとにして、ウェブスターは一篇の復讐劇、流血悲劇をつくりあげた。登場人物のほとんどすべてが、いわば人間の形をした悪魔であり、フラミーネオのことばによれば、次の如しということになる。

O my lord! methodically.

As in this world there are degrees of evils:

So in this world there are degrees of devils. (IV. ii, 57—9)*

その 'degrees of evils' ならびに 'degrees of devils' の頂点に立つのが、題名となっている「白魔」すなわちヴィットーリアであるが、劇中のヴィットーリアに関して、ブラッドブルック (M.C. Bradbrook) は

There is, as it were, a subordinate side of Vittoria which is innocent. Actually she is guilty, but there is a strong undercurrent of suggestion in the opposite direction. It never comes to surface plainly, but it is there. Her character is a reconciliation of opposites²⁴⁾

という。ヴィットーリアはある時は「売女 (whore)」(IV, ii, 44) であり、またある時は 'this good woman' であるが、どちらが彼女にそなわった真の性質であるか。作者ウェブスターのえがいたヴィットーリアの性格を劇そのものの進行にしたがってみてゆくことから始めることにする。

2

ヴィットーリアが最初に登場するのは、第一幕第二場、場所は自分の家である。ブ라운編のテキストの註によれば The location of this scene is Camillo's house とある。カミロはいうまでもなく彼女の夫である。この家で彼女は、妻子があるにもか

* 引用文は John Russel Brown 編 'The White Devil (The Revels Plays)' による。

かわらず以前から彼女の愛を求めているブラチアーノに口説かれるのである。この時ヴィットーリアの兄フラミーネオはブラチアーノの腹心の部下、秘書であり、不道德なことにブラチアーノの欲望を成就させようと努力している。言いよるブラチアーノに対して、ヴィットーリアは夢に託して、自分の夫カミロと、ブラチアーノの妻イザベラを亡きものにするよう告げる。悪魔のひとりフラミーネオですら次のようにいわざるをえない。

Excellent devil.

She hath taught him in a dream

To make away his duchess and her husband (I, ii, 256—8)

この結末は第二幕第二場続く「黙劇」(A dumb show)と「第二の黙劇」(The second dumb show)となってあらわれる。イザベラは夫の肖像画に就寝前口づけをする習慣があったが、画に毒が塗られていたため死ぬ。カミロは部屋に持ちこまれた木馬を跳ぼうとするところを、フラミーネオに首をつかまれ、他の男たちの手助けにより首の骨を折られて死亡する。こうしてヴィットーリアは自分の思いどおりになったのであるが、第二の黙劇でマルチェロ (Marcello; フラミーネオの弟したがってヴィットーリアの兄弟である) がその主君フランチスコと枢機卿モンティチェルソ (Monticelso, a cardinal, later Pope Paul IV) をよび、フラミーネオその他と共に捕えられ、その後ヴィットーリアも捕えられる。夫の死については証拠不十分であるが、すでに彼女の悪名は高くそれを近隣の王国に伝えるためとモンティチェルソは語る。

For sir you know we heve nought but circumstances

To change her with, about her husband's death,—

Their approbation therefore to the proofs

Of her black lust, shallmake her infamous

To all our neighbouring kingdoms,—(III, i, 4—8)

ヴィットーリアは淫乱と断ぜられ、法廷で糾弾されることになる。(III, ii) この場面における彼女はきわめて冷静であり、論理的な発言をなし、臨席していたイギリス大使をして、「彼女は勇敢な心の持主だ (III, ii, 140)」といわせるほどである。告発役のモンティチェルソに This whore, forsooth, was holy, といわれて、Ha? whore—what's that? (III, ii, 77) とききかえし、モンティチェルソが、ながながとその特徴を説明すると、「その特徴は私にはありません。」と応ずる。また夫カミロの死に関して Your 'unhappy/Husband is dead. といわれても、O he's a happy

husband/Now he owes nature nothing. (III, ii, 109—11) と答えるありさまである。結局モンティチェルソは判決として彼女を「売春婦更生所 (the house of convertites)」にとじこめることになる。

ヴィットーリアが次にあらわれるのは、売春婦更生所に、ブラチアーノとフラミーネオが訪れた時である。フランチスコからヴィットーリアあての恋文をブラチアーノが見て嫉妬心にあおられ、ヴィットーリアを売女という。

...

And blow her int' his nostrils. Where's this whore? (IV, ii, 44)
そこへヴィットーリア登場して、ブラチアーノは彼女を次のようになじる。

...

God's precious, yon shall be a brave great lady

A stately and advanced whore, (IV, ii, 75—6)

これに続く数回のせりふのやりとりのあと、ヴィットーリアは弁舌をふるって、ブラチアーノの嫉妬にかられた非難を撤回させようと努め、ついに

Wilt thou hear me?

Once to be jealous of thee is t'express

That I will love thee everlastingly,

And never more be jealous (IV, ii, 139—42)

といわせるにいたる。形勢逆転してヴィットーリアはブラチアーノに怒りのことばを投げかけつづけ、完全にヴィットーリアの勝利となる。このあとブラチアーノは、フランチスコの手紙の中に、ヴィットーリアをここから出してフロレンスにつれてゆく (And with a princely uncontrolled arm/Lead you to Florence, where my love and care/Shall hang your wishes in my silver hair') (IV, ii, 31—3) とあったのを思い出し、彼女をここから出しパドヴァ (Padua—彼の領地) に連れてゆく決心をする。フラミーネオもその計画に賛成し、実行するなら今夜が最も適当と進言する。なぜなら法王がなくなり、新法王選出のために市内が混乱しているからという。

次の幕 (第五幕) 第一場で、フラミーネオの次のことばによりブラチアーノとヴィットーリアの結婚式がおこなわれたことがわかる。

In all the weary minutes of my life,

Day ne'er broke up till now. This marriage

Confirms me happy (V, i, 1—3)

この時ブラチアーノのパドヴァの宮殿には、ひとりのムーア人とふたりのハンガリー

の貴族がきている。ムーア人はフラミーネオの解説によれば、ブラチアーノとフロレンス公（＝フランチスコ）の間に戦争がおこりそうであり、その戦いへ参加を望んでいるということである。実はこのムーア人こそ復讐のためにりこんできたフランチスコの変装であった。ブラチアーノは彼に結婚を祝う試合（barriers—ふたりの闘士が腰までの柵をへだてて、剣とほこでたたかう）をみてくれという。その試合に際して、ブラチアーノは試合場にあらわれるやいなや具足係をよび、かぶとのあご当てをとれと命ずる。つまりあご当ての部分に毒が塗られていたのである。その後錯乱状態がつづき、最後にはフランチスコにやとわれたロドヴィーコ（Lodovico イザベラを恋し、のちフランチスコの共謀者）に絞め殺される。ヴィットーリアはブラチアーノの死に対し

O me! this place is hell (V, iii, 179)

といって退場する。ヴィットーリアが手に本を持ちザンケ（ムーア人、ヴィットーリアの召使、最初フラミーネオを恋し、後にフランチスコを恋す）と共に登場、フラミーネオもふたりに続いて登場（V, vi）そしてこれまで働いた報酬がほしいという。

You are my lord's executrix, and I claim

Reward, for my long service, (V, vi, 7~8)

ヴィットーリアは、さきにフラミーネオが弟マルチェロを殺したことをとりあげ、

I give that portion to thee, and no other,

Which Cain groan'd under having slain his brother. (V, vi, 13—4)

と書いてこれを読む。また

You are a villain. (V, vi, 16) という。

フラミーネオは二対の（two case）のピストルをもって再登場、そしてブラチアーノの死後四時間内にヴィットーリアを殺し、自分も死ぬことを誓ったという。理由はブラチアーノはきわめて嫉妬深く、その死後ヴィットーリアが他の男のものになるのを恐れてのことだという。（He did, and 'twas a deadly jealousy, /Lest any should enjoy thee after him）（V, vi, 37—7）ヴィットーリアは死にたくないといった後、ザンケに知恵をつけられて、死に方を教えてという。そして女ふたりでフラミーネオを撃つが、その身体をふみつけるだけで後を追って死ぬことはしない。しかしフラミーネオもさるもので、実は死んではいなかった。ふたりの愛情をためす策略で空包であったという。

この時カプチン派僧侶に紛した [disguised as Capuchins] ロドヴィーコ、ガスパロ（Gasparo）その他登場、ヴィットーリアはフロレンス公に殺されたいという

が拒否されロドヴィーコたちに刺される。

My soul, like to a ship in a black storm,
Is driven I know not whither (V, vi, 248—9)
O happy they that never saw the court,
Nor ever knew great man but my report. (V, vi, 261—2)

といって死ぬ。

フラミーネオも

...

Let me harsh flattering bells resound my knell,
Strike thunder, and strike loud to my farewell (V, vi, 275—6)

と最後に壮絶なことばを残して息たえる。

ヴィットーリアを中心にして劇の筋を略述すると以上ようになる。結局ヴィットーリアは悪の化身である。この悲劇自体が悪魔と悪魔のたたかいで、たとえばハムレット (Hamlet) のクローディアス (Claudius) 殺害のように、はっきりと正が邪に勝つということがない。その中でやはり第一等の悪魔はヴィットーリアであろう。せりふだけではその顔つきがなかなかうかんでこないが、ローマの法廷の場 (III, ii) でモンティチェルソの辛辣な告発に平然と応酬するところを見ると、きわめて冷やかな表情をしていたのであろう。また非常に勝気なところは次のせりふによっても明らかである。すなわちブラチアーノが彼女を売春婦更生所に訪ねてきて、フランチスコの手紙の文句に嫉妬して、ヴィットーリアを罵倒し、亡き妻 (イザベラ) に *How lovely art Thou now!* (イククック体筆者、*thou* とはイザベラのこと) という。それに続く長いせりふがあり、ここには、いいよったのはブラチアーノであることを示し、決して下位には立たぬ気概がみられる。ヴィットーリアは悪魔としての挙措進退はきわめてはっきりしていて、反省のことばもないが、最後には、

O my greatest sin lay in my blood.

Now my blood pays for't. (V, vi, 240—1)

と罪ぶかさをさっている。これによって観客はヴィットーリアをゆるすのであろうか。

またヴィットーリアは前夫カミロはもちろんのことブラチアーノに対しても愛情をいだいているとは思われぬが、ブラチアーノが具足係に毒を塗られたかぶとをはずさせる時、急いでやってきたヴィットーリアは

O my *loved* lord,—poisoned? (イタリック体筆者)

という。loved というのはここだけであるが果して本心であったろうか。心からブラチアーノを愛していたとすれば、冷やかなヴィットーリア像は修正を要することになるだろう。

3

ヴィットーリアを第一級の悪魔とすれば、それに続くものは、フラミーネオもしくはブラチアーノ、フラミーネオの主従であろうか。フラミーネオが Pursue your noble wishes, I am prompt/As lightning to your service,—O my lord (I, ii, 4—5) とけしかなければブラチアーノも妻とカミロを殺害するにはいたらなかったであろう。また女衒 (pander) とよばれても、(母親 コルネーリアによって、I, ii, 217; ブラチアーノによって、IV, ii, 49; ヴィットーリアによって IV, ii, 136) ひたすら自己の栄達のために邁進するこの兄がいなかったならば、ヴィットーリアも夢に託してブラチアーノをそそのかしまた復讐されることもなかったであろう。そうであればフラミーネオこそ最高の悪魔、この悲劇事件の火つけ役ということになる。

フラミーネオは、彼をしたうザンケに対しても誠実ではない。もっとも彼が女性全般に信をおいていないことは、第五幕第六場、例のヴィットーリア、ザンケのピストルにうたれたふりをして、ふたりをあざむき、その後立ちあがってということばに明白に示されている。

... Trust a woman? never, never (V, vi, 160)

...

視点を変えフラミーネオの目から見れば、彼の周囲には悪魔がむらがっていることになる。つまりこの地上の悪魔は絶対的存在ではなく相対的であることになる。彼はヴィットーリアを Excellent devil (I, ii, 256) という。これは前に引用したとおり、ヴィットーリアが夢に託して殺害をすすめることばを聞いた時である。ザンケとヴィットーリアが彼をピストルで撃って、倒れた身体をふみつけた時ふたりを O cunning devils! (V, vi, 148) という。ブラチアーノに対しては、As in this world there are degrees of evils:/so in this world there are degrees of devils/You're a great duke; I your poor secretary, (IV, ii, 58—60) と悪事にかけても、ブラチアーノにはかなわないことをほのめかす。

このようなフラミーネオであるが、第五幕第二場で弟マルチェロを殺害するのは観客の目には唐突に映るであろう。なるほどこのふたりは、その前に(第五幕第一場)ザンケをめぐっていさかいをおこした。マルチェロは兄にザンケをよせつけるなとい

い、さらに If. I take her near you I'll cut her throat. (V, i, 198) といっているが。これだけで弟殺しというのは、いかに悪魔であってもうなずけない。しかもその後フラミーネオはザンケに執心ではないのではないのだから。

ブラチアーノはフラミーネオにいわせれば大悪魔である。「黙劇」において、彼が妻の殺害を依頼した魔法使い (conjuror) がぬかりなく殺人をなしとげると、平然と Excellent, then she's dead (A dumb show 24) とうそぶく。これはたしかに冷酷である。しかしその後は、イザベラの兄に復讐されるまで他に悪魔的所行はない。時には *Whose death good pardon*, (IV, ii, 105 イタリア体筆者、whose はイザベラのこと) という。してみると悪の点ではやはりフラミーネオの方が上であるというべきであろうか。

フローレンス公フランチスコは、悪魔の階級ではどのような位置を占めるであろうか。彼には妹の復讐という大義名分がある。そしてそのためには変装をし、共謀者を連れて敵地にのりこみ目的を達する。フランチスコ自身手をくだすのではないが、共謀者ロドヴィーコは *You would prate, sir. This is a true-love knot/Sent from the Duke of Florence*, (V, iii, 174—5) といつて死期の迫っているブラチアーノを絞殺してしまう。フランチスコは悪魔ではないとすれば、第一級のマッエヴァエリの徒一当時のイギリス人の考えていたマッキエヴェリズムという点で一といえるであろう。これに比してロドヴィーコの悪党ぶりは単純素朴というべきか。しかも最後にはブラチアーノとイザベラの子ジョヴァンニ (Giovanni) にとらえられ、拷問されることになる。ジョヴァンニはこういっている。

Away with them to prison, and to torture; (V, vi, 291)

モンティチェルソ枢機卿のちの法王パウロ四世は第三幕第二場「ヴィットーリア糾弾」の時のみ活躍するが、他の場ではそうではない。ロドヴィーコを狡猾だと非難するが、かえって同じことばをかえされる人物である。悪玉ではないがそれだけ精彩を欠いている。

この悲劇の中の世界では、悪が支配的で善は力をもたない。フラミーネオはザンケに対して誠実でないと言いたけれども、それは当然のことであって、誠実であっては劇中のフラミーネオのあのような奮闘はなかったはずである。ブラチアーノも策謀をめぐらすときの彼でなければ全くの小人物である。1600年を境としてイギリス社会全体がそれまでと様相を異にして流血悲劇が特に好まれるようになったことは夙に指摘されているところであるが、ウェブスターも時代の好みにあわせようと、現状に不満な、すきあらば他人を不幸にせずにはおかぬ男女を舞台の上におしあげてきたので

ジョン・ウェブスター「白魔」について

あろう。

註

- 1) F.L. Lucas: The Complete Works of John Webster Vol. 1 p.49
- 2) Ibid p. 50
- 3) Ibid p. 70
- 4) M.C. Bradbrook: Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy p. 187

(たにざき ひさと 本学講師・英語)